

【書評・紹介】

岡田 淳子 編『ふと感じた「？」を探るⅡ わたしたちの文化人類学』

(札幌, 共同文化社, 2012年5月25日, A5判, 142頁, 1200円+税)

小坂みゆき

表紙画像

- ・まえがき
  - ・北海道の考古・人類学の先覚者—高畑宜一の履歴
  - ・ある女性作家の書誌作成の試み—宗瑛書誌に向けて
  - ・明治時代におけるジェンダー—アイヌ社会と和人社会の比較
  - ・プロ野球を見に行くということ—観戦の様態と地域性
  - ・ガラスの歴史と非日常空間のグラス
  - ・博物館のあり方を問う—「博物館二様論」をめぐって
- <エッセイ>
- 肩の力を抜く / ジャワの家と親しさ / 篤農のスヌメ? / 今年の植林ツアー / 我が田に水を引く / ジャワの人づきあいの長さ / 魔法のエプロン
- ・あとがき

本書は、文化人類学をキーワードとした、9人の執筆者による論文とエッセイ集である。そして、2008年に発刊された『ふと感じた「？」を探るⅠ わたしたちの文化人類学』の二冊目でもある。研究者による文化人類学の専門書とは異なり、本書のもっとも興味深いところは、本書を企画したきっかけ、論集完成までの歩み、そしてどのような人たちによって書かれたのかという点である。評者もこの9人の中の一人であり、本書全体の持つ意味について、客観的な視点を保ちつつも当事者であることで実感した本書の意義について書いてみたい。

本書の執筆者は、「岡田淳子ゼミの会」のメンバーである。「岡田淳子ゼミの会」とは、岡田淳子氏（北海道民族学会顧問）が教鞭をとっていた大学のゼミ生や受講者、研究会などを通じて指導を受けた人々が集まってできたものである。その中には本会の会員も含まれている。組織されたのは、2006年のことであった。

本書と同様に、大学を卒業したゼミ生により執筆された本には、菅原和孝氏の編集による2006年の『フィールドワークへの挑戦——<実践>人類学入門』がある。フィールドワークの授業において行われたゼミ生らによる当時の研究発表を菅原氏が編集、紹介し、その中で優れていると評価された論文についてはそのまま掲載するという体裁をとっている。これに対し、本書は、現在においてメンバーが疑問や関心を持っているテーマを取り上げ、執筆している点で異なり、これが本書の特徴といえる。

本書の執筆者には、大学などの研究者の他、会社員、自営業など、様々な業種の仕事についている人々も含まれている。テーマは各自のそれぞれの関心に従ってとりあげられているが、進んできた道も違うことから内容は非常に多岐に渡っている。本書の内容、各論文についての概略は以下の通りである。

## ① 北海道の考古・人類学の先覚者 高畑宜一の履歴

明治中期の北海道における考古学、人類学に関わり、札幌市指定有形文化財となっている『旧琴似川流域の竪穴住居跡分布図』を製作したとも言われている高畑宜一の生涯と活動について年譜という形で整理を試みたものである。

## ② ある女性作家の書誌作成の試み 宗瑛書誌に向けて

1930年前後の短期間に作家として活動し、山田秀三氏の伴侶であった山田總子氏について調査したものである。そして、女性小説家「宗瑛」についてはあまり知られていないので、それを調べて明らかにした、作品及びその発表年を記載した年表が掲載されている。

## ③ 明治時代におけるジェンダー アイヌ社会と和人社会の比較

明治時代に日本へ渡航した外国人の日誌などから当時のアイヌ社会と和人社会における女性の地位について比較検討し、当時のアイヌ社会をジェンダーの視点から論じようとしたものである。アイヌ社会では子どもの教育について男女差がはっきり見られず、息子については父親が親権者となり、娘については母親がなる。また、結婚・離婚などは当事者の意思によって決められた。当時の和人社会とは大きく異なっていたことが紹介されている。

## ④ プロ野球を見に行くということ 観戦の様態と地域性

プロ野球を観戦する場所である球場に集まる人々の行動を、甲子園球場、東京ドーム、札幌ドームの3球場で調査比較したものである。球場に集まる人々は、必ずしも野球観戦だけを目的としているわけではなく、一種のコミュニケーションの場としても利用している。そこには様々な家族や友人との環形が見られ、それは、地域により違いのあるものとなっている。

## ⑤ ガラスの歴史と非日常空間のグラス

日常的に使用されているグラスについて、ガラスが発明されてから現在に至るまでの歴史、実用的なガラス製品から鑑賞用の製品まで、その技術の進化をたどっている。更にカクテルグラスとワイングラスを例にとりて非日常空間における利用のされかた、効用について報告がなされている。

## ⑥ 博物館のあり方を問う「博物館二様論」をめぐって

2005年に服部敬史氏が提唱した「博物館二様論」を取り上げて、日本の現在の博物館の抱える問題を明らかにして、学芸員の役割と彼らが担うべき博物館のありかたについて言及した。執筆者は、二様論について一定の評価をしながらも、忠実に欧米型を規範とし、そこに日本独自の手を加えなおすのが着実な方法ではないかと提言する。

## ⑦ エッセイ

3人の執筆者により7篇のエッセイが掲載されている。これらは、各論文の間にあり、ちょっとした息抜きとして読むことができる。

例えば、わがままメタボ猫のガーフィールドのような肩の力を抜いた生き方もいいと感じたという話や、偶然タンスの隅から見つけたエプロンをみて思い出したことや、農業経営の現場で篤農家といわれる人々を見て尊敬の気持ちを持ちつつも、その維持の困難さについて考えたことなどを述べている。また、インドネシアをフィールドにして研究をすすめてきた中で人との繋がりについて書いたものもある。論文を執筆できなかったメンバーも、エッセイを通して参加しており、これが本書に日常の様々な風景を描き出すための重要な要素となっている。

2010年3月4日に本学会と日本文化人類学会北海道地区研究懇談会の共催で講演会が実施さ

れ、そこで東北大学の沼崎一郎氏による「公共人類学の可能性と必要性」という講演があった（報告記事として桑山 2010）。この講演の中で、沼崎一郎氏が所属する東北大学では「文化人類学を「大学の外に開く」、公共建築や公共交通のように「誰でも入れて、誰でも使える」公共物としての文化人類学へ」にしようとする試みについて述べられていた。

大学や研究会を離れて、仕事に追われながらも、文化人類学的視点を持ち続け、日常の興味や疑問に対する探究心を失わないでいこうという考えで企画されたゼミの結晶が本書になったのだ。これは、沼先氏が述べる東北大学での試みにも通じる意義を持つといえるのではなからうか。

編集者の岡田淳子氏は、本書のまえがきで「文化人類学とは、『世界の人々が分かり合える』ための学問と考えている。…日々の生活の中で疑問を掘り下げ、第三者的立場にたって考えていくことが、ほかの文化に暮らす人々を理解することにつながると考えている。これが『わたしたちの文化人類学』であり、多くの人々に広めたいと思う」（本書:3）と述べている。

日常の中で、ふと一歩足を止めて考えてみると、数え切れないほどの疑問に囲まれていることに気づき、驚き、もっと知りたいと思う。2ヶ月に一度のゼミでは、各自が進捗状況を発表する他、このような日常の中で気づいたことが話題となることもある。岡田淳子氏からは、これらの問題に対して幅広い視野をもつことの重要性が示される。本書のタイトルである『ふと感じた「？」を探るⅡ私たちの文化人類学』は、日常の生活の中に文化人類学の視点を取り入れていく実践そのものである。

本書は、少々荒削りなところはあっても、各人がそれぞれ現在関心のある「？」を対象としてその研究成果を発表しており、新たな「知」を得ることの楽しみを漢字ながら執筆しているように思われる。文化人類学を大学から外に広げるといふ動きを先取りし、日常を文化人類学の目で見直すという新しい試みを行った論文集として意義を持つものである。

## 参考文献

桑山敬己

2010 「公共人類学の可能性と必要性—沼崎一郎氏講演会」『北海道民族学』6: 115-116.

菅原和孝（編）

2006 『フィールドワークへの挑戦——<実践>人類学入門』世界思想社

## 資料

沼崎一郎

2010 日本文化人類学会北海道地区研究懇談会・北海道民族学会共催 講演『公共人類学の可能性と必要性』配布資料

## HP

日本文化人類学会・北海道地区研究懇談会

<http://www.jasca.org/meetings/archive/hokkaido.html>

（こさか・みゆき／北海道大学大学院）